
リリカル・ブレイブ ～闇を抱きし霊魂使い～

八つ橋うい郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカル・ブレイブ 　　闇を抱きし靈魂使い　

【Nコード】

N8098X

【作者名】

八つ橋うい郎

【あらすじ】

（昔諸々の事情で削除したものを改訂、再投稿したものです。）

優しい未来があったのは、別の次元の他人事。歩んできたのは厳しい現実。流れ着いた異世界で彼女を待つのは――？

プロローグ（前書き）

もう一作の完結が近い＆先の展開考え中のため、何故か頭の中でストーリーが進行していたこの作品を投稿することにしました。

プロローグ

魔界——それは闇の眷属たる悪魔共が闊歩する暗黒世界。力が全てを支配する弱肉強食、弱者必滅の無慈悲なる地。そんな魔界の一画、隕石や謎の金属塊が散乱、浮遊する場所——通称『星の墓場』に場違いな影が一つ。

「……………」

肩まである黄緑色の髪を後ろで一つに纏め、漆黒のロングコートに身を包み粗末な布袋を背負った女。悪魔ならば耳の先端が尖っているが、彼女のそれは丸い。彼女は魔界の住人ではない人間、名をマローネという。

そして彼女——マローネの周囲には、全身に幾つもの目を持つ三メートルほどの異形の悪魔——センチネルが倒れ伏していた。

「まだ、足りない……」

闇を纏った自分の手を見ながら呟くマローネ。

「もっと、もっと、ヤツを——」

彼女が言いかけた時、地響きのような音が轟き、空中に渦——時空の歪みが現れた。

「何！？ くっつ……！ ああっ——！」

堪えようとするが奮闘空しく、マローネは時空の歪みに吸い込まれる。暫くすると音が止み、同時に時空の歪みも消え去った。

「うゝん……、特に変わったことはないみたいツスね」

「面倒事が起こらなくてホッとしたようなつまらないような、何とも微妙な気分ツス」

「ともかく、戻って殿下に報告するツスよ」

「アイアイサーッス!!」

それからさらに暫くして、やって来たのはうる覚えで作ったペンギンのぬいぐるみのような三匹の悪魔——プリニー。何やらワイワイと騒ぐと、すぐに来た道を引き返していった。

星の墓場は地場や重力が不安定なため、たびたび異世界から様々なものが飛ばされてくる。そして、その逆も然り——。

第1話：漂着（前書き）

さっそくお気に入り登録してくれた方が一人いるようで嬉しい限りです！

第1話：漂着

ミッドチルダ、とある森林地帯。

「う、うう……。私は、確か時空の歪みに吸い込まれて……」

目を覚ましたマローネは立ち上がって軽く頭を振ると、体に異変が無いことを確認してコートに付いた土を払い落とした。視線を巡らせると、木々の向こうに町が見える。

「……とりあえず行ってみましょうか」

手のひらに出した長方形の黒い金属を地面に落とすと、一瞬淡く光りすぐに消えた。それを見届け、マローネは町に向かって歩き出した。

それから数分後……。

「次元震が観測されたのはこの辺りのはずだけど……、特に異常は無いみたいだね」

白い服を着た栗色の髪の女性が舞い降りてきたことは、当然マローネは知る由も無い。

ミッドチルダ首都、クラナガン。大勢の人々で賑わう町の中をマローネは歩いている。

（予想はしていたけど、やっぱりここはイヴォワールではなさそうね）

彼女の故郷『イヴォワール』は、海に浮かぶ大小様々な島で構成された世界。確かに城と城下町が乗るほどに大きな島もあるが、この都市はあまりにも大きすぎ、そして何よりも科学技術の差がある。ボトルメールを応用した船であるボトルシップが関の山のイヴォワールには、陸上で動く金属製の車など存在しない。

（全体的に清潔だし、見たところ治安は悪く無さそうだけど……）

そう考えを巡らせるマローネは、周りの人々の視線を集めていた。今季節は夏と秋の間ほど、そんな時期にロングコートを着ているマローネはどうしても目立つ。もっとも当の彼女は全く気にしておらず、

（中傷や石つぶてが飛んでこない分、向こうよりずっと歩きやすいわね）

むしろそんなことを思っていたが。

考え事を続けながら歩いていると、人気の無い廃墟が立ち並ぶ場所に着いていた。廃棄区画と呼ばれる所である。

（何かいる……）

このような場所はいわゆる日陰者の溜まり場になりやすい。職業がらその手の連中を相手取ることが多く気配に敏感なマローネは、思考を中断し警戒を強める。

ほどなくして現れたのは、日陰者連中ではなく丸い体をした赤銅色の生物が二匹。目と脚が無く短い腕と尻尾が生えていて、同族を丸呑みにできそうな大きな口が特徴的だ。

「……フッフ、アッハハハハハハ！」

球体生物を視界に捉えたマローネは哄笑を上げ、両頬が引き裂けんばかりに口の端を吊り上げた。

「こういうのを運命の再開って言うのかしら？　ロマンチックね反吐が出そう！！」

「ゲギヤッ！？」

球体生物に肉薄すると一体を蹴り飛ばし、左の手のひらに描かれた収納用魔法陣から反りのある黒い刃が付いた槍——スコーピオンを抜き放ち、もう一体を両断する。その僅かな間に球体生物の数は十倍以上に膨れ上がり、今もなお増え続けている。闇色に染まったスコーピオンに両断され、地面から飛び出す雷に消し炭にされるよりも、数が増える方が早い。

小さく舌打ちしたマローネは収納用魔法陣から金属板を取り出すと、球体生物の群れの中に投げ込みつつ叫んだ。

「彷徨える魂よ、導きに従い現れ出でよ！！　奇跡の能力、シャルトルーズ！！」

叫びに呼応して金属板が淡く光った次の瞬間つむじ風が巻き起こり、球体生物達がバラバラになりながら吹き飛ぶ。

「クオオオオオオオオオン！！」

その中心で遠吠えを上げるのは、刀のような一本角と赤い鬣たてがみを生やした狼、風を操る魔獣クーシー。

クーシーが駆け出すと再びつむじ風が発生し、球体生物が刻まれて

いく。マローネもまたスコピオンを振るい、危なげなく球体生物達を屠る。そして――

「これで打ち止め、みたいね」

斬った球体生物の数が二百を超えたあたりで、出現が止まった。

第2話：邂逅、契約（前書き）

どうにもアクセス数が伸び悩んでいます。あまり原作が有名でないからか、文章がマズいからか……。

第2話：邂逅、契約

赤銅色の雪のように積み重なっていた球体生物の亡骸が形を失い闇となり、溶けるように消えていく。

「さて……」

それには目もくれずに、マローネとクーシーは廃墟の一つに視線を向けた。

「そこの方、何か御用かしら？」

「気付かれてたんですね……」

廃墟の陰から出てきたのは白い服を着て杖らしきものを待った女性。マローネと入れ違いで森に来た女性だ。

「グウルルルルル……」

隠れていた上に杖に武器を持っている女性のことを敵対者と判断したのか、クーシーがつむじ風を起こしながら呻り声を上げ女性を威嚇する。

「大丈夫よウルフェン、戻って」

「……ウオン」

しかしマローネが制すると若干警戒心を残しながらも一声鳴いて答え、淡く光った後霧散し黒い金属板となった。それを収納用魔法陣に戻し、続けてスコピオンも仕舞うマローネ。一連の流れに啞然としていた女性だが、すぐに我に返り自己紹介をする。

「時空管理局、高町なのは一等空尉です」

「私はマローネ。請負人^{クローム}よ」

「請負人？」

「依頼を受けてそれを達成する仕事、要は何でも屋よ。大半は荒事だけど。私の方からも聞きたいことがあるのだけど――」

女性――なのはとの問答で、もともと確信に近かった予想が完全なものとなった。質問という形を取っているが実質は確認である。

「ここは、と言うよりこの世界はイヴォワールではないのね？ 時空管理局というレイヴン……、傭兵団や会社は聞いたことがないのだけ」

「そう、ですか……。ここはミッドチルダという世界で、マローネさんは次元漂流者、世界を超えての遭難者ということになります」

それからマローネはなのはから時空管理局やミッドチルダについて聞きながら、やって来たヘリで彼女が所属する部隊、『機動六課』の隊舎へと向かった。

機動六課隊舎、部隊長室。

現在この部屋にいるのは部隊長である八神はやとと分隊長のなのはとフェイト・T・ハラオウン、副隊長のシグナムとヴィータ、そしてマローネの六人。武器等を隠し持っていないことを証明するためにコートを脱いでいた。金属製の膝当てが付いた厚手の黒いアーミーズボンに同色の半袖シャツという飾り気の無い恰好で、首からは水晶のロケットに覆われた、銀色の台座に青い石がはめ込まれたペンドラントを提げている。そして五人が息を呑んだのは、マローネの両腕や胸元に刻まれた幾つもの傷痕。うっすらと残っている程度の

小さなものから、挟られたような大きなものまである。

ともあれいつまでも見ているのは失礼なので、はやては一つ咳払いをして、それぞれ自己紹介をしてから本題に入った。

「……それで、マローネさんの故郷のイヴォワールという世界なんです。現在までには確認されていないんです。搜索は続けていますが、最悪の場合は……」

「そう、ならこちらで身の振り方を考えるしかないわね」

未練が無いわけではない。無いわけではないが、それはイヴォワールにいたとしてもはや取り返ししようのないことなのだ。

「まだ帰れないと決まったわけではありませんが……」

「……あの、話は変わるんですが、一つ質問よろしいですか？」

ひとまず世界についての話が終わったところで、なのはがマローネに問う。

「ええ、どうぞ」

「あの時、狼が金属の板に変わったのは一体……。魔法ではなかったようですが……」

「あれね。イヴォワールでは先天的に生まれ持ったり後天的に目覚めたりして、特殊な能力を持つ人があるの。私は前者、持っているのは『奇跡の能力 ちから シャルトルーズ』。物体に霊魂 ファントム……。死者の魂を憑依させて一時的に肉体を持たせる能力よ。……もっとも、名前は父親の能力のをそのまま使ってるだけけど」

マローネの父、ヘイズのシャルトルーズは、治癒と現世への魂の定着という二つの効果があった。しかしマローネは後者の効果のことを知らない。何故なら――

ヘイズも母ジャスミンも、そして兄貴分アッシュも、彼女の家族の魂は誰一人として戻ってはこなかったのだから。

「……その力は、どうしても使わないといけないものなんですか？」

ややあつて、フェイトが険しい表情で絞り出すように言った。『命』を重んじる傾向が強い彼女には、マローネの力が死者を道具にしているように思えたのだらう。

「そうね。そちらのお嬢さんには言っただけで、請負人^{クローム}は荒事に関わる人が多いから」

「でも、他の仕事を選ぶことも——」

「無理よ」

「どうして!？」

叫ぶフェイトに、マローネは変わらぬビジネススマイルを浮かべたまま言った。

「能力者は迫害対象だもの、請負人が傭兵にしかねない」

「え……!？」

「迫害、って……、何でだよ……?」

フェイトが言葉に詰まり、ヴィータが思わず問いを漏らす。ミッドチルダをはじめとする管理世界では魔法の素質は生まれながらに決まっており、大きな魔力を持つ者、そして召喚魔法のような限られた者にしか使えない稀少技能^{レアスキル}を持つ者は例え若年でも優遇される。イヴォワールの能力者達は管理世界で言えば全員が稀少技能を持っていることになるというのに、何故優遇どころか迫害されるのか、ヴィータにはわからなかった。

「人は自分達と異なるものを排除しようとするものよ。能力の特性によつては嫉妬もあるかもね」

例えば、とマローネは続ける。

「『白狼騎士団』のラファエル団長は、剣速を大幅に上げる『極みの能力 ヘリオトロープ』を持っているけど、これは他の剣士からは卑怯と見られかねない力でしょう？」

「……修練でその速度を超えることはできないのか？」

「多分無理ね。残像ができるほどの速さだもの」

「なるほど、確かに卑怯と言えば卑怯かもしれない……」

口ではそう言いつつも、むしろ手合わせしてみたいと思う私は異常なのだろうか、と内心で呟くシグナム。

決してラファエルは能力に依存し驕るような男ではなく、鍛錬を怠らず騎士道精神を重んじる高潔な人物だ。だがそんな彼に対しても「能力者だから」と陰口を叩く者もいる。強大な魔力を持ち、幼少期から多くの戦果を上げてきたが故に少なからずそういったことを経験している隊長達は何も言えない。

「もつとも、私の場合は単純な異端に対する嫌悪だろうけど」

数いる能力者の中でも特殊な『靈魂と対話し、憑依させる』という力を持つマローネは、特に強い迫害を受けてきた。

『悪霊憑き』——それが彼女に向けられた蔑称。白眼視され、理不尽な中傷を受け、石やビンを投げつけられたこともあった。体中に刻まれた傷の中には、そうして付いたものもある。顔に付いた傷を重点的に治してきたのは、女としての無意識的な抵抗だったのかも

しない。

「あの、ごめんなさい……」

「構わないわ」

浅慮だったとフェイトは謝罪するが、マローネは気にした様子も無く答える。それが慣れてしまうほどに誹謗中傷を受け続けてきた彼女のこれまでを思い起こさせ、フェイトには罵声を浴びせられるよりも辛かった。

「いや、それにしてもマローネさんが腕の立つ人で良かったです。戦う手段の無い一般人やったらどうなつてたことか……」

場の空気を変えるために話を変えるはやて。決して明るい話題ではないが、あの雰囲気が続くよりはマシだ。

「あの変な生物、最近あちこちの世界に出てきて、騒ぎになってるんです」

球体生物ははつきり言って弱く、威力や腕にもよるが魔力弾一発、武器一振りで倒せる。厄介な特殊能力を持っているわけでもないの、新兵どころか訓練生でも苦戦することはまずない。では何故騒ぎになっているかと言うと、やたらと数が多いのである。一匹見かければなんとやら、七十匹を下回ることはなく、酷い時には三百匹を超えることもあるほどだ。その不気味な姿がウジャウジャと蠢き湧き出してくるさまは局員達の士気を削り、また弱いと言っても人間の肉を食い千切るくらいの力があるので、一般人には十分な脅威になる。新手の生物テロという可能性を考慮し、かつて世界を震撼させた『JS事件』の時からおよそ三年ぶりに機動六課が結成された。

……という旨をはやてから聞いたマローネは、忌々しさを感じさせる声音で吐き捨てるように言った。

「……やっぱり、昔から変わらず数だけが取り柄なのねあのゴミ共は」

「昔からって……、何か知ってるんですか!？」

身を乗り出さんばかりのはやてに一つ頷き、マローネは話し始める。

「十二年前、13歳の時に、アレの親玉とやり合ったことがあるの」

「親玉……?」

「……サルファア。『破壊神』とも呼ばれる、骨みtainな怪物よ」
「破壊神、サルファア……」

はやては考え込む。破壊神などと呼ばれるくらいなのだから、間違いないく強大な相手だろう。球体生物——サルファアの使い魔のこともある。より多くの戦力が欲しい。だから——

「マローネさん、あなたに依頼があります」

「何かしら?」

「力を、貸してください!」

「……具体的な依頼内容は『サルファアの討伐』でいいかしら?」

「——ッ、はい……」

マローネが浮かべた今までのビジネススマイルとは違う、牙を剥くような笑みに気圧されながらも、はつきりと答えるはやて。少しして、マローネの笑みが元に戻る。

「その依頼、受けましょう」

「あ、ありがとうございます！」

こうしてマローネは協力者として、機動六課に加わることとなった。

（サルファー……、今度こそ、今度こそ殺してやる！！）

彼女の胸の内で渦巻くどす黒い憎悪に気付くものは、まだいない。

第2話：邂逅、契約（後書き）

デイスガイア4のDLCでマローネが今日から配信ですね。これでマローネ無双ができるぜ！

それでは、感想お待ちしております。

第3話：請負人、その実力（前書き）

本作のマローネ、声のイメージはもちろん水橋かおりさんなのですが、声の感じはリメイク版のクローネの方が近いです。原作マローネだと幼過ぎる感じがするので。

第3話：請負人、その実力

「さて、それじゃマローネさんに実力の程を見せてもらいたいんやけど——」

場所は変わって訓練場観戦席。他のメンバーとの自己紹介が済んだところで、はやてがそう切り出した。

「すぐにいけますか？」

「ええ、問題無いわ。依頼を受けた以上、私が使い物になることを証明しておかないとね」

言って、マローネは訓練場に飛び移る。

「こっちからは誰が出る？」

「では私が——」

「待って」

立候補しようとしたシグナムをフェイトが制した。

「……意外だな、てつきりお前は彼女を避けがちになると思ってたのだが」

「これから一緒に仕事するんだから、そういうわけにはいかないよ。でも、口で何を言っても自己満足の言い訳にしかならなさそうだから、せめて競い合っていていきたいなって思ってる……」

「そういうことなら今回は譲るが、変に手心を加えたりするなよ。彼女に対する侮辱になるからな。それに——」

マローネの方を鋭く見据えながら、真剣さを増した声音でシグナム

は続ける。

「そんなことをすればお前は確実に負けるぞ」

「あのー、あの人そんなに強いんですか？」

青髪の少女——スバル・ナカジマが尋ねた。フェイトは管理局屈指の実力者であり、三年前も機動六課に所属していたスバルもそれをよく知っている。表情から察するに先の質問は疑心よりも興味から来たものだろう。

「ああ。レイジングハートが記録していた映像を見る限りでは、型はメチャクチャだがひたすらに戦い慣れている」

「……大丈夫、油断も手加減もしないから」

フェイトもまた、訓練場へと飛び移る。

「お待たせしました。よろしくお願いします」

「こちらこそ。……ところで、私の能力の都合上多対一になるかもしれないけど、構わないかしら？」

「はい、大丈夫です」

策と言うほど大層なものではないが、一応シャルトルーズへの対抗手段は考えてある。

「二人とも準備はいいみたいやね。それじゃあ……、試合開始!!」

はやてが右手を振り上げ、宣言した。

「はあああつ!!」

「……」

裂帛の気合いと共に振るわれるバルディッシュによる斬撃を難なく防ぐマローネ。

「——ッ！」

何度かそれを繰り返したが時、目を見開くと弾く勢いを利用して後ろへと跳んだ。その直後、彼女がいた場所に金色の輪——バインドが現れる。

（読まれた！ でも……！）

不意打ちのバインドがかわされたことに少し驚きつつも、フェイトは魔力刃を展開させたバルディッシュを振るった。

「ハーケンセイバー……！」

「ふっ！」

撃ち出された魔力刃はマローネに一突きにされ砕け散るが、フェイトの周りには数個の魔力弾が。

「プラズマランサー……！」

「……」

魔力弾はマローネに届く前に地面から噴き出した電撃に打ち砕かれたが、フェイトは焦らない。プラズマランサーは時間稼ぎに過ぎず、本当の目的は別にある。

「ソニックフォーム……！」

フェイトのバリアジャケットの表面積が減り、バルディッシュの形が鎌から剣に変わった。そしてそれまで以上の速度でマローネに接近すると、連続で斬撃を繰り出し始めた。

ここまでの一連の流れ、媒体となる金属板を出す暇を与えないことが、フェイトが考えていたシャルトルーズ対策だ。

「てやあああああつー!!」

「随分、速いのね……」

やはりマローネは全て防いでいるが、速さが上がれば重さも上がるの、徐々にガードが開き始める。

（いける！ このまま一気に——）

フェイトがそう思った時、

「……コンフライン憑依」

そんな弦きが聞こえ、同時に急激に威力が増したマローネの一撃によって弾き飛ばされた。

「くうつ……！ 一体何が——」

再びマローネを視界に入れた瞬間、変貌したその姿にフェイトは絶句した。

指先は骨のように白く硬くなりコートの上に肋骨や背骨の装飾が現れ、顔には竜の頭蓋骨のような仮面を着けている。

「……いくよ」

「ッー!!」

仮面の口が開き、光る。フェイトが半ば反射的に横に動いた直後、一瞬前まで彼女がいた場所を、丸太ほどの太さの黒い光線が駆け抜けていった。

「ほう、あんなこともできるのか」

一方その頃観客席。皆が啞然とする中、シグナムが感嘆の声を上げる。

「テストロツサは媒体を出させないようにしていたようだが、まさか自分自身にも憑依させられるとはな。これはマローネが有利になるか」

「あ、あの、憑依って……？」

冷静に戦局を分析するシグナムにオレンジ色の髪の少女——ティアナ・ランスターが恐る恐る尋ねた。無論『憑依』という言葉の意味を聞いているわけではないだろう。

「ああ、彼女の能力は魂……、有り体に言えば幽霊だな、それを物体に入れて召喚するものらしい」

「「「ゆ、幽霊！？」「」」

思わぬ返答にスバルと赤髪の少年——エリオ・モンディアル、桃色の髪の少女——キャロ・ル・ルシエが驚愕する。

「驚くのは無理ねえけど、偏見持ったりはするなよ。別に取って喰われるわけじゃねえんだから」

人格的に大丈夫だとは思っているが念のためにヴィータが釘を刺し、

それはそうと、と軽く笑いながら続けた。

「あの見た目といい技といい、どっかの少年誌の某死神漫画に出てきそうだな」

「ああ確かに！」

ヴィータとはやては楽しそうだが、実際に相對している方はそれどころではない。

「はあ……、はあ……」

憑依前コンファインとは一転、シグナムの予想通りフェイトは劣勢だった。連射と言っほどではないが頻繁に飛んでくる光線に加え、牽制にドクロ型のエネルギー弾が撃ち込まれてくるため、思うように距離を詰められないのだ。砲撃魔法ならばマローネの攻撃を貫けるだろうが、いかんせん魔力を溜める暇が無い。

（このままじゃジリ貧……、ちょっと危険だけど攻撃を相殺しながら一気に距離を詰めるしかない！ 光線を撃った後、次の攻撃までにほんの少し間が開くから、そこを突けば……！）

プラズマランサーでドクロを相殺しながら思考を巡らせるフェイト。ドクロの数が残り二つになった時、仮面の口が光った。

（今っ……！）

体を捻って紙一重で光線をかわしながら、マローネへと接近、バルディッシュを振るう。突進力も加わったその一撃で、マローネの体勢が崩れる。

「これでえっ——！」

止めの攻撃を繰り出すためにフェイトが腕に力を籠め、そして――

「ご苦労様、ペック」

その腕に何かが巻き付き、動きを阻害した。

それは白く細長い尻尾で、その主は黄色いローブを被った蛇のような体の魔物――スペクター。ペックと呼ばれたそのスペクターの両腕、もといローブの両袖はフェイトの方に向けられており、その先端には電気が溜まっている。

「い、いつの間に……？」

「最初からよ。具体的には私がこの世界に飛ばされて目が覚めた時からずっと、この子は私の足下、地面の中にいたの」

スペクターが属する妖霊族は肉体そのものが魂に近く、壁や地面をすり抜けることができる。この特性に目をつけ、マローネは護衛として常に一体地中に忍ばせているのである。

「さあ、どうする？」

尋ねるマローネが着けている仮面の口には、すでに光が溜まっている。体に接触している以上、高速で移動して離脱してもペックは付いて来てしまう。さりとて彼を振り払おうとすれば、その間にマローネから光線が飛んでくる。この状況でフェイトが取れる手段はただ一つ、

「参りました……」

降参することだけだった。

第3話：請負人、その実力（後書き）

そろそろアサギの方も執筆したいですね。

第4話：軽い対話、見えぬ底（前書き）

原作ではマローネが能力に目覚めて請負人になったのは十一歳の時（電撃ゲーム文庫参照）らしいのですが、本作では大分異なります。予めご了承ください。

第4話：軽い対話、見えぬ底

模擬戦が終わり、ペックは再び地中へ沈んでいきマローネは元の姿に戻った。

コンファイン
「憑依」

続いて額から角が生え、両肘両膝から先——見えているのは手首から先だけだが——が鋭い爪と剛毛を生やした獣のものに変わる。ウルフェンの魂を憑依させたマローネは大きく跳躍して観戦席へ跳び移り、再度元の姿に戻った。フェイトは飛んでその後続く。

「ほう、息一つ乱していないとは……。まだ余力があるようだな。やはり無理を言っても私が出ておけばよかったか……」

「て、手加減されてたんだ……」

シグナムが感嘆しつつ本音を漏らし、フェイトが落ち込む。自分の攻撃を悉く防がれ、その上手加減されていたという事実はなかなかに堪える。

「そう気を落とすなテストロッサ。お前が弱いわけではない、速度と魔力以外で彼女が上回っていたただけだ」

「フォローになってないよそれ……」

シグナムのフォローという名の追い討ちにますます落ち込むフェイト。なお、マローネの魔力はB - 相当。憑依状態では魂の魔力に比べて増加し、先の模擬戦ではA相当となっていた。

「そこは経験がものを言った、ってところね。伊達に二十年も請負^{クロ}ム」

人やってきたわけじゃないもの」

「に、二十年!？」

予想外の言葉にフェイトが驚く。部隊長室での話から十二年前の時点では請負人になっていたことは推測できたが、まさかその倍近い経験を積んでいたとは。

「それじゃ、マローネさんって実は結構な高齢——あいたっ!」

「このバカ! 軽々しくそういうこと言うんじゃないの!」

一方、彼女の実年齢を知らないスバルが直球で質問し、ティアナにはたかれた。実際高齢ではないため、マローネは気にすることもなく答える。

「イヴォワールにはラファエル団長みたいに外見と歳が釣り合わない人もいるけど、私は二十五歳、外見相応なんじゃないかしら」

『白狼騎士団』団長ラファエル、彼の見た目は二十代前半の美青年だが、実年齢は軽く見積もっても六十歳を超えている。若作りというレベルを超越しているため、『倒した相手の若さを吸い取っているのでは?』という噂さえある（本人は否定しているが）。

「ところで、イヴォワールには変わった生き物が多いんですね」

五歳という幼さで請負人という危険な仕事に就いているあたり、能力者であること以外に何か事情があるのではないかと思ひ、なのはが話題を変えた。

「ああ、あの子達はイヴォワールにいたんじゃないの。『魔界』っていう、人間やイヴォワールのモンスターよりもずっと強い生物が

住む世界にいたのよ。修練のためにそこへ行った時にスカウトしたの」

高濃度の魔力がそうさせるのか、魔界の生物はたとえ同種であつてもイヴォワールのそれより戦闘能力が高い。聞いた話では魔界は幾つも存在し、それらを治める『魔王』と呼ばれる者達の中には容易く世界を消し飛ばせるほどの力を持つ者もいるという。恐らくサルファーさえも瞬殺できるのだろう。

だがマローネは魔王を探し助力を請うことはしなかった。それほどの存在がたかが人間の小娘の頼みを聞いてくれるとは思えない。それに何より――

（サルファーは私が、私の手で殺す……！ 絶対に……！）
「なるほど、強いわけだ。……ところで、一つ提案というか、頼みがあるのだが」

シグナムの言葉で思考を中断し、そちらに意識を向けるマローネ。

「短時間でもいい、明日から実戦形式で訓練に参加してくれないか？ 隊長陣も今一度鍛え直しておいたほうがよさそうだからな」
「……ええ、私としてもこっちでの戦い方をより多く体験できるのはいいことだしね。引き受けましょう」

僅かに考えた後、にこやかに答えるマローネ。

「ありがたい。よろしく頼む」
「……よろしく願います！」
（良かった、打ち解けてるみたいで……）

マローネ達の方を見ながら、フェイトはそつと安堵の息を漏らす。

自身が過剰反応してしまったこともあったので、マローネが他のメンバーとうまくやっていけるかどうか不安だったのだが、問題なく打ち解けているように見える。だから、

彼女の笑顔が社交辞令や愛想笑いとは違う、何か仮面のようなものに見えたのは、気のせいだと思ったかった。

第4話：軽い対話、見えぬ底（後書き）

アサギの方を待っていた方、すみません。完結までのストーリーは
大体思い浮かんでいるのですが、戦闘シーンが……。しばらくはこ
っちがメインになるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8098x/>

リリカル・ブレイブ ～闇を抱きし靈魂使い～

2011年11月17日18時48分発行